

The wave traveling all over the world

エロ・ヘルツ

3

2023年
5月



「テラ・ヘルツ」は、お寺の「寺」と未知の可能性を秘めた周波数の単位「テラヘルツ」をかけたものです。この冊子が目には見えな
い小さな波となって、みなさまの心に届いた
ら……そんなふうに願っています。

目次

凡愚のつぶやき	4
お寺の掲示板	8
教えて！ フダイシさま	10
くらしの知恵箱	13
こども部屋をノック	16
お坊さん WITH ナンタラ	18
門徒さんのおたより	20
煩惱ロボット メカムラケン	22

凡愚のつぶさき

私が仏を忘れても、仏は私を忘れない。

今年の夏、臨終勤行（俗にいう枕経）ごんぎょうでの一考察。

88歳で亡くなった女性のご遺体を前に、同居していた息子さんが呆然と座っていた。お勤めした後、息子さんに「お寂しくなりました」と言葉かけると、ハツとした表情で話し始めた。

「住職……母は本当に仏さまを大切にしていました。朝夕、お佛飯をお供えして、お経をお勤めするのが日課でした。お念仏も称となえていまし



た。いつも『ありがとう』と感謝の言葉を口にしていました。」

ここまで話すと、顔を曇らせてこう続けた。

「その母が晩年、癌になってからは、お経をお勤めすることはなくなり、お仏壇は荒れていきました。『ありがとう』という口癖は『死にたくない』に代わりました。私はそれが残念でなりません。そんな母は救われたのでしょうか？」

問いの重さに、私は答えに詰まり、少し時間をいただくことにした。

そうだな。この男性の言葉を借りていうなら「残念」になっていくのは彼女だけではない。私はどうだろう？ 脳梗塞になって意識がないまま人生が終わっていくかもしれない。交通事故で思考することも許さ

れないまま娑婆の縁が尽きるかもしれない。その時、お念仏を称えることが出来るだろうか？ 仏さまのことを思い出すことが出来るだろうか？ 聖教をめくりながら、改めて考える。

「私が確かだから」救われていく教えではなかったよな。確かなのは仏さま。残念になっていく私を、残念なまま浄土に生まれさせ、仏にしてください。仏さまの「必ず救う」という呼び声を聞き入れれば、そこで救いは成立し、「いつどこでどのような最期をむかえても」救われていく教えではなかったか。このことを*お経には「そくとくおうじょうじゅうふ即得往生住不退転いちなんぼつきにゅうしょうじゅうしじゆ」*論には「一念発起入正定之聚」と示されている。興味のある方はお調べを……。

*原則として、お釈迦様の説法を記録したものが「経」、お釈迦様の教えを解釈し、体系化したものが「論」。

後日、息子さんに上記の内容を踏まえ「お母さまは浄土に生まれ、仏さまとなり、今ここに一緒に過ごしてくださいますよ」という内容のご法話をさせていただくと、「そんな質問しましたかね。取り乱して覚えてないんです」とまさかの返答。まあ、これもお育てかな。

何をしでかすかわからない私が、何が起るかわからない人生を、トボトボと歩いている。あたたかい慈悲に包まれながら今日も。



お寺の掲示板

鳴るは風鈴
鳴らすは風

私が聞いて、
私が称えるお念仏。
称えさすのは
阿弥陀さま。

「風鈴」の名は法然上人の名付けと雑誌にあったので、調べてみました。

『風鈴』の名は一説には法然が「ふうれい」と名付けたことに由来する。「風鈴」という表記は鎌倉末期に作られたとされる国宝『法然上人行状絵図』に「極楽の七重宝樹しちじゅうほうじゆの風のひびきをこひひ、はつくどくち八功德池のなみのをとをおもひて、ふうれい風鈴を愛して」とある。これが後



に「ふうりん」と読まれるようになった。』(Wikipediaより)

風鈴の音に、浄土の樹々を吹く風の響き、池の波の音を思ったようです。

鳴るは風鈴 鳴らすは風

さて、鳴っているのは風鈴だが、鳴らせているのは風。私の称とえるお念仏はどうでしょうか。称えているのは間違いなく私ですが、称えさせているのは、いつでも、どこでも、どんな時でも私をお擾めせとっていく南無阿弥陀仏の願いのこころ、「本願のはたらき」です。

「風の便り」という言葉があります。風鈴の音に、亡き人を偲びつつ、南無阿弥陀仏のはたらきを味わっています。

前住職 村上 充生

教えて！

フダイシさま

*フダイシさまは永照寺の経蔵の中にいる。
たくさんの経典が収められた輪蔵をお守りしている。



職場に嫌いな人がいます。

転職しようか迷っているのですが、どう思いますか？（60歳女性）



嫌いな人（人だけに限らんが）と顔を合わせなければいけない苦しみを「おんぞうえく怨憎会苦」というんじや。これは逃れることのできない苦しみの一つでもあるんじやよ。ところで、なぜ嫌いなんじやろ。本当は羨ましいとか、自分と似ているとか……。「嫌い」の



うーん。この問題の答え。どのお経にも書いてないな。今のスマホが壊れたら新しいものを買わざるをえなくなるな。あつ、「壊せ」と言っているのではないぞ。スマホは大切にするんじやぞ。



新しいスマホを買ってもらうにはどうすればいいですか？
(13歳男子)

中身を分析して、対策を考えてみてはどうか。強烈なハラスメントのように逃げた方がいい場合もあるが、基本的には逃げても、逃げた場所でまた嫌いな人は不思議と現れるもんじやよ。



「墓じまい」をして悪いことが起こるようになった気がします。どうすればいいですか？（75歳女性）



墓じまいをしたことを「悪いこと」と思っているから、悪い出来事に意識が向いているだけかもしれないぞ。もっと広い視野で、ゆっくり日々の出来事を観察してみてもどうかかな。きっと、生活している中で「いいこと」もたくさんあるはずじゃ。また、悪いことの原因を墓じまいのせいにしてているが、本当の原因は生活態度や対人関係など、他のところにあるかもしれないぞ。

くらしの



知恵箱

ほんとうの「貧乏」とは

先日、食事に出かけた時のことです。わたしはラーメン、炒飯、餃子、ゆで卵を注文しました。お腹が減って欲張りになっていたのかもしれない。途中からお腹がパンパンになって、苦しみながら完食しました。丁度いい量なら「美味しい」のに、食べすぎると「苦しい」。ゲームも、



決められた時間を破ってやりすぎると「楽しい」から「飽きてるけどやめられない」になるし、カードも、買ってもらいすぎると「嬉しい」から「また同じのた。もういらん」になりますよね。「欲しい欲しい」と我慢を忘れて欲しがることは、海の水を飲むようにきりがありません。貧乏とは、お金がない人や少しのものしか持っていない人のことだと思っっている人が多いようですが、「まだ欲しい、まだ欲しい」と満足を知らない心がほんとうの貧乏なのです。

おれがの「が」^(我)を捨て、おかげの「げ」^(陰)で生きる

日本人があまり使わなくなった言葉のひとつに「お陰様」があります。陰に「お」と「様」までつける感覚は、現代人にはわかりづらいかもしれません。

人間国宝で染色家の志村ふくみさんは、自然の材料だけで、えもいわれぬピンク色を表現しました。誰もが桜の花びらを用いたと考えましたが、その色は、桜の皮からとったというのです。淡いピンクは、皮や幹、樹液や根っこ、樹木全体の色で、花びらは先端の姿にすぎなかったのです。

見えているものの「陰」には大きなはたらき、力が存在するのです。先人たちは、この心を「お陰様」と呼び、手を合わせてきたのです。

こども部屋をノック

人生イロイロ 優しさもイロイロ

*源信さまとその弟子たちが住む比叡山の恵心院。最近、鹿が遊びにくるようになりました。あまりの可愛さに、弟子たちは餌付けをしています。境内は鹿で溢れていました。

ある日、源信さまが鹿の方に歩み寄りました。次の瞬間、このホノボノとした光景をうち破るように、持っていた青竹で鹿たちをバシバシ叩いたのです。鹿たちはびっくりして山へ逃げていきました。源信さまの



行動をおかしく思った弟子たちは声をそろえて言いました。

「お師匠さん、鹿をいじめるなんてあんまりです。」

その言葉を聞いて、源信さまは答えます。

「ワシも鹿たちが可愛い。でも、この比叡山に住むのはいい人間ばかりではない。鹿を捕まえようと弓矢を持って待ち伏せしている者もいるではないか。そんな者に近寄れば、簡単に殺されてしまう。人間は恐ろしいということをお教えるのが本当の優しさだ。」

弟子たちは源信さまから、優しさにもいろいろあることを学んだのでした。

お坊さん WITH ナンタラ

お坊さんと占い

● 毎回ランダムにテーマを選び、エピソードを語ってもらいます。

朝のニュースでも雑誌でも、「占い」を見ない日はありません。占いの言葉に過剰に振り回されている人もしかしたら見かけます。「私ってどうなんだろう」「どう生きていけばいいんだろう」と、自信がない時や不安なことが起きた時、耳触りのいい言葉や「上手いかな原因はこれだったのだ」と自分を納得させる言葉を求めてしまいます。「自分は悪くない。運気が悪い。上手いかないのは星回りが悪いせいだ」と、現実から目を背ける言い訳として占いにすがることもあります。

しかし、運気ではなく自分の何らかの言動が、今の結果を生んでいる

という事実もあります。そのことを深く見つめるのも大切ではないでしょうか。占いにより人生を切り開くつもりが、かえってその言葉に縛られ、本来の自分という「主体性」を見失った生き方にならないよう注意したいものです。楽しむのは自由ですが、逃避の手段としての占いはオススメできません。

ちなみに、お坊さんは占いの言葉ではなく、仏さまの言葉を中心にして生きています。そのような生き方に転換すると、占いや加持かじき祈祷とうはあらずと必要なくなります。

かなしきかなや道俗どうぞくの
天神地祇てんじんじきをあがめつつ

良時吉日りょうじきちにちえらばしめ
ト占祭祀ぼくせんさいしつとめとす

親鸞聖人

門徒さんのおたより



モノクロームの男に問う (30代女性)

8 度目にもなるお盆の帰省でついに暇した私は、退屈しのぎに幼い頃は怖くて寄らなかつた押入れから、おもむろに古びたアルバムを取り出していった。陽も盛りを過ぎた夕涼みのころ、頼杖をつきながらページを進める。しばらくすると、ピシッと決まってこちらを向くモノクロームの男の姿があり、思わず同じく背筋が伸びた。誰なのか、わからなかつた。

その日は写真をアテに、父と晩酌をした。そこで初めて昔の家族たちの話を聞いた。思ってもみない、暮らしや生業をしていた家族だと知る。妙に目を引いた例の男はというと、私の曾祖父だった。ロシアや上海、長崎で写真をやっていたらしい。なぜ海を渡ったのか、いつか夢で教えてくれないだろうか、それから写真には時折、手を合せている。

無敵の肝臓

井上剛（50代男性）

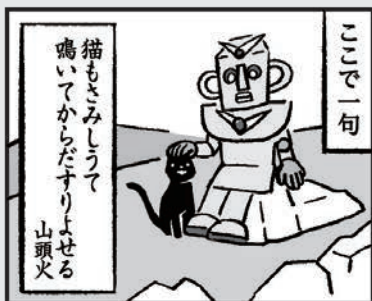
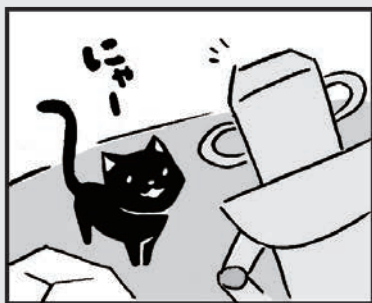
ピロピロと珍しく朝に携帯が鳴った。しかも、もっと珍しい事に妹からである。「父さんが病院に來ないって連絡があった……」生真面目で約束を忘れる様な男ではない。慌てて駆け付けたが、既に極楽浄土に旅立っていた。119番に電話すると、「お父さんの心臓マッサージをして下さい」といわれ、既に固くなっている身体に、ただただ涙を流しながら、「父さん還ってきて」とマッサージを繰り返した。

私の子供の頃、ダンベルで体を鍛える父の「カチャンカチャン」という音が

モーニングコールであった。柔道のし過ぎで、耳は餃子の様に膨らんでおり、鎖骨は折れっぱなし、腕には腱を縫合する時に出来た20cmの傷跡が残っていた。そんな父を支えてきた母は、息子である私には頑なに柔道をさせようとはしなかったそうである。柔道9段、警察官として定年まで市民を守り、自慢の父であった。

私はどんなに呑んでも二日酔いをした事がない。父も同じ事を言っていた。呑みすぎた次の日は自然と父に伝えている。「無敵の肝臓をありがとう」と。

煩悩ロボットメカムラケン



編集後記



長門の青海島にある「鯨墓」を見に行きました。当時、捕獲した母鯨から胎児が見つかることがあり、心を痛めた人々は、海を見下ろす高台にお墓を建てて弔い、鯨にも戒名をつけて過去帳に記録し、位牌と墓の三位一体で葬ったそうです。彼らが鯨に抱いた思いは、源信さまと同様、人も動物も同じ「命」と思う人の心なのでしょうか。「優しい人ばかりじゃないぞ、気をつける」とノラ猫を追いかけていた友人を、少し見直した今日この頃です。

●「テラ・ヘルツ」は、みなさまからのおたよりやご意見ご感想を募集しています。以下のQRコード・ハガキ・FAX・メールなどから、お気軽にお送りください。

住所・名前・電話番号・年代・性別を
ご記入ください

〒803-0814

福岡県北九州市小倉北区大手町16-16

永照寺 テラ・ヘルツ係

Fax : 093 - 591 - 4989

E-mail : tera.hertz.book@gmail.com

スマホで
簡単



テラ・ヘルツ 3

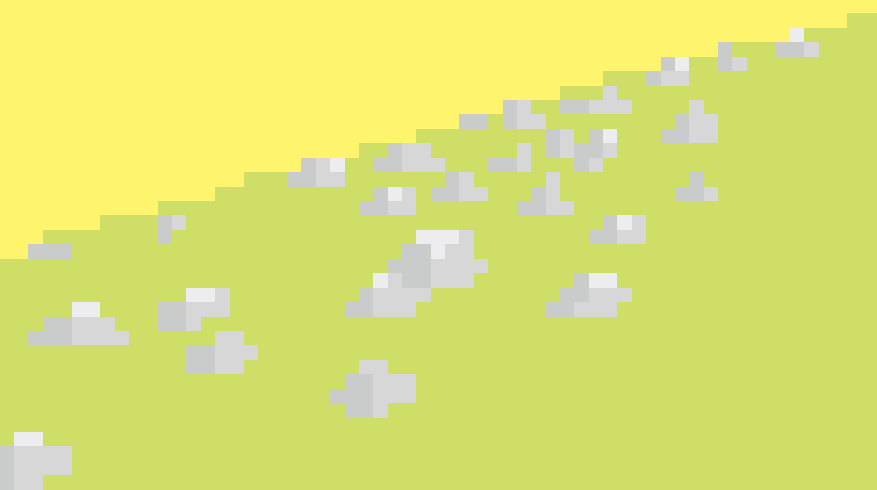
初版発行 令和5年5月1日

発行 永照寺

執筆 村上慈顕、村上充生

編集 青木紀子

デザイン・イラスト 南佳奈江



To be continued...